

道元とフィヒテの「自己」について

笠井 貞

道元禪師（1200～1253）とヨハン・ゴットリープ・フィヒテ（1762～1814）とは、時代や環境を異にする思想家であるが、ここで道元における法と自己、フィヒテにおける神と自己との関係を中心に対比して、両思想の特徴をより明瞭に認識する手掛りの一つとしたいと思う。

道元の見解は大略次のようになろう。人間は現実においては、我欲名利に繫縛された自己である。無明のために貪・瞋・痴などの煩惱がある。吾我・我執を捨離するには観無常が第一の心得である。諸行無常・刹那生滅であり、自己は無常である。観無常が菩提心の根源となる。菩提心は自未得度先度佗の心である。仏教の縁起説の系譜を引く道元において、人間の構成は五蘊により、五蘊皆空であるから、自己は空・無実体であり、不変な自我統一ではない。道元における仏法と自己との関係は次のようになる。自己を中心に考えて、仏道を修証するのは迷いである。万法を外から見ないようにするため自己を忘れて、万法の方から進んで自己を修証する時、

そこに悟りの世界が開かれる。仏に成る真理の道を習うということは、自己とは何かを究明することである。本来的自己を究明するというのは、対象化され実体化された自己を自己の本質と錯誤し、それを保持しようとする我執的自己を滅却することである。それは自己即仏、生仏不二を究明することである。これが仏法に随うことである。不幸の根源となる我執的自己の否定が悟りである。人が法を求める時、心の外に求めてはならない。たとえ自己の心を内に向けても、自己を対象的に見ているのでは、真の自己ではない。法が自己に明確に証得されること、人法不二となることが、即ち本来的自己の発現である。法とは人間存在そのものの法則であると同時に宇宙法則である。法は真理であり、真理を説く仏の教えであり、更に真理によつて支えられている万物である。自己と、自己を包む万物は心であり、心は縁起そのものである。悟りとは、般若により、縁起・空の真理を覚ることである。般若は戒と定とに基いて成立する。道元において、ひたすら

自己即ち身心を仏法に投げ捨てて、無所得の行、不染汚の行を修する所に、直ちに悟りが成就するのである。修証一等である。日常生活の一切の行爲も修であり、自己を捨てた修行は証の上での修行であるから証を待つ必要はない。仏とは不染汚の行を行ずる我々の自己に外ならない。仏は必ず仏としての行を日常の行爲に実現するのであり、それが行仏である。要するに道元における自己とは、まず慮知念覺としての自己、即ち意識的自己である。そして大乘仏教の立場から身心は一如とする。また我執からの脱却により自他不二である。世界から孤立した自己はなく、自己から孤立した世界はなく依正不二である。行仏としての仏そのものが自己であり、生仏不二の自己本来の面目を悟る所に仏と同死同生が実現する。こうして本来的自己としての仏と法は一如である。行持に休みも終りもない。人間本具の清浄な自由な仏性は、行ずる我々の自己に現成する。仏性は、万人の一体性・共同性・平等性の根拠である。

フィヒテは次のように考えている。真実の生活でない仮象の生活は、不断の転変であり、絶えず生成と消滅との間をさまよい、不断の変化によつて引き裂かれていく。単なる仮象の生活は、無常性における無常なものを愛せうと試みる。このような生活は必然的に空虚な、悲惨な、不幸なものである。有限で儂い何物も自己を満足させることはできないのである。

道元とフィヒテの「自己」について（笠井）

る。フィヒテにおいて、自己とは何であるか。私は私自身によつて生成したのではない。私は私の外の他の力によつて現実化したのである。私は自己自身によつて限定された自然力の、宇宙によつて限定された表示である。にも拘らず私自身は独立であり、他において、他によつてでなく、私自身として或るものであることを欲する。さて精神的なもの、純粹知性と、物世界におけるこの身体とは、全く一であり同一である。更に宗教的な眼で洞察すれば、自己は神と結合している。そして自己の周囲に見るものは、自己と結合している。神と人間の同一性が、万人の一体性・共同性・平等性の根拠となる。フィヒテの知識学においては、世界の、或は存在の根源である概念は、神の像なのである。概念は、絶対的に自由な、現実的な力である。自我は概念を有し、概念において主観的に直観するものであり、そして自己の単なる存在によつて、概念における多様なものの総合的統一なのである。自我は絶対的概念の生命だからである。個人的自我は、絶対的概念の或る制限的形態の現象である。自我は、自己に単に現象としてだけ現われなければならないものであつて、独立の存在としてではない。それゆえ、自己を道徳的にすることができるといふ自己の能力を信することは、神の像がまだその人の内に現われていないという確かな証拠である。自己の能力に対する信は、眞の生に対する反抗なのである。

二九九

こうしてフイヒテは次のように記している。真実の生活は、神の内に生き、神を愛す。真実に生きるとは、真実に考えて、真理を認識することである。思惟の最も高い飛躍によつてだけ人は神性に到る。永遠なもの、絶対者（神）は、人間の内に存在し、不断に人間を包んでいる。それゆえ人間がなすべきことは、ただ儂いもの、無価値なものを放棄することである。そこで直ちに、永遠なものは、一切の至福と共にその人に來るであろう。思惟の厳しい自己集中、自己省念が、本来的自己になる、至福の生活に到るための条件である。

人間は、フイヒテによれば、一者（神）を像において把握することができるだけであつて、人間自身、実際において一者になり、また一者になることはできない。我々の自己は、絶対的存在ではないが、我々の現存在の最も内部の根底においては、これと連関している。なぜなら、若しそうでなければ、我々は決して現存在することができないであろうから。知または我々の自己は、神的現存在そのものであり、これと端的にである。神は我々自身に対して真理として存在して、我々の内に生きて活動している。この原則をこの方式で持たない人は、自己の内に真実の自己を持たず、多様なもの、無常なものの上を、影のように流動しているのである。神以外に真に実在するものはない。自我の根柢は、自我自身の内にはなく、神にある。自己は神の活動の目的であり、自己の意識

の自主性と自由との根柢は神の内にあるから空虚な仮象ではないのである。絶対者（神）は存在・光・生命・愛であり、生きた意識である。自己は現存在・神の像・図式・現象である。また神とは、神に帰依した人、神の靈感を受けた人がなす所のそのものである。神は雲の彼方にいるのではなくて、到る所に見出せるのである。自己が神に帰依すれば、神は我々の心に見出せるのである。フイヒテの場合、実際の真実の宗教性は、単に觀照的、靜觀的でなく、敬虔な思念に沈むばかりでなく、活動的であることが必要である。宗教性は、神が実際に我々の内で生きて働き、神の仕事を成就しつつあるという、衷心からの意識にある。神が我々の内で活動していない場合、神との合一の我々の意識は、錯覚であり、實質がない。さてフイヒテにおいて、人間がまだ自己自身何か或るものであろうと欲求する限りは、神はその人間に來ない。なぜならどのような人間も神に成ることはできないからである。しかし人間が自己を純粹に、完全に根柢まで滅却すると、神だけが残つており、一切における一切である。人間が自己自身を滅却する時、人間は神の内に没入するのである。この自己滅却は、自己の現存在によつて規定された、より低い生に全く対立した、より高い生の開始である。即ち純粹でより高い道徳性の立場の取得である。神への愛は、端的に個人的自己愛を根絶する。なぜなら個人的自己愛の滅却によつて、人は

神への愛に到達するからである。それに反して、個人的自己愛のある所に神への愛はない。神と人間とは、神の愛において一である。全く融合・混合するのである。自己のより高い

本性、即ち自己の内の神的なものに従わないということ、固有の意志、固有の選択、自己を誇る固有の知恵を放棄しないことなのであり、このことが必然的に最高の不幸の根源である。結局、自己は、フイヒテによれば次のようにならなければならぬ。即ち完全にイエス自身となり、余す所なくイエスの人格に変化すること、即ち我々が考えているのではなくて、あたかもイエス自身が考えているかのように、全くイエスと同様に考え、あたかも我々の代りにイエス自身が生きているかのように、全くイエスと同様に生きることである。イエスに変化し、それによつて神に変化したものは、もはや彼自身生きているのではなくて、神が彼の内に生きているのである。人がまだ自己を持つている間は、善いものは人に存在しないことは確かなのである。神は特有の形で人間に内在している。自己の本性は、不変・無形態であるが、反省によつて分裂して多様な形態をとるのである。反省の立場から、自己を思惟の立場に高めることにより、仮象を脱却して真理に到る。フイヒテにおいて、自己は即ち哲学であり、知識学は人間それ自身であるという。自己を注視することを出発点としたフイヒテは、究極点においても、自己は一切において、

他者を見るのではなく、真実には、自己と自己の内に隠れている神を見ているのである。

要するに道元における自己は、仏に成ることが出来る。自己は本来仏性を具えている。戒と坐禅を中心とする行持によつて、自己を滅却するならば、人は直ちに仏を實踐する。フイヒテにおける自己は、神に成ることはできない。しかし自己は本来神性を具えている。自己が神への沈潜と集中によつて、一切の固有の意志と固有の目的を放棄し、純粹に自己を滅却するならば、必ず神を見る。神において自己自身を純粹に滅却する反省が、フイヒテにおける学の立場なのである。

結局、両思想家は共に、利己的の自己を滅却することを力説する。道元においては仏自身に、フイヒテにおいてはイエス自身になりきらなければならないのであり、そこに真実の、根源的、本来的の自己が成就する。両思想共に、生と学とは統一されており、また無我性・敬虔性を有している。両者共に内面性を尊重し、宗教における実践行為を重視した。道元は仏と自己、フイヒテは神と自己との根源的一体性を主張している。以上に論述した外にも種々の類似性が見られる。しかし思惟方法・思想形態などが異なるため、差異性の大きいことも認めないわけにはいかない。